

保護者と学校とのよりよい関係を考える (2年次) ～保護者との関係づくりに生かす校内研修パッケージの提案～

島根県教育センター教育相談スタッフ
相談セッション共同研究

【 要 旨 】

本研究は、保護者と学校とのよりよい関係づくりをテーマとした校内研修を開発し、研修パッケージとして提供することにより、学校のOJTを支援することを目的としている。まず、保護者と学校の関係性の現状と課題を探り、研修内容を検討して試作版を作成する。試作版は、指導主事による出前講座等での実施、各学校の担当者による校内研修での実施をもとに検証・改良を重ね、校内研修パッケージを完成させる。

【キーワード：保護者との関係づくり 校内研修 OJT支援】

1 研究の背景

子どもたちの成長を見守り、支える存在として、保護者の役割が重要であることは言うまでもない。保護者は、学齢期を終えるまで我が子にかかわり続け、我が子とともに喜び、悩みながら子どもの成長を支える唯一の存在である。

文部科学省は平成21年度に、学校運営改善に関する取組についての調査研究事業の一つとして「保護者等への対応」を掲げて全国9つの自治体による研究実践を行い、それぞれの自治体の取組及び成果と課題について紹介している。いずれの実践においても、課題として、多様化する保護者からの要望への適切な対応や、保護者と学校とのそれぞれの思いを相互理解することの難しさを挙げている。また、それを認識した上で学校と家庭が今後さらに緊密に連携して子どもの成長を支えることの重要性について示している。

これらの調査がなされてから10年以上の年月が経過した現在、改めて保護者と学校との関係に注目してみると、保護者との関係づくりがうまくいかず、思いの行き違いや、コミュニケーション不足等からトラブルに発展するケ-

スは、過去と比べて決して少なくなっていない。保護者の価値観は以前よりも多様化し、対応の難しさが増している。また、教職員の年齢構成の様相がこれまでとは大きく変わってきている近年、保護者と良好な関係性の中で連携できている者ばかりではなく、その関係の構築に苦慮し悩みを抱えている教職員も少なくない。学校現場においては、保護者とよりよい関係を構築し連携していくための基本姿勢を身につけることが、これまで以上に求められている。

また、様々な教育課題に対し、校内研修を通して共通理解を図り、スキルアップに取り組むOJTの推進が求められて久しい。保護者との関係に様々な課題を抱える学校において、この課題解決に向けた研修機会の必要性は多くの教職員が感じている。しかしながら、多忙な学校現場においては、適切な教材や研修推進者の選定が難しく、十分な時間の確保も困難なことから、保護者との関係づくりに関する校内研修はあまり取り組まれてこなかった現状があるのではないかと。

島根県教育センター教育相談スタッフでは、

これまで県内の教職員に対して実施してきた生徒指導・教育相談の内容に係る能力開発研修や、教職経験年数に応じた集合研修の中で、家庭と学校との相互理解及び連携の大切さについて伝えてはきたものの、この視点から学校全体を支援する機会は十分に提供できていなかった。

そこで本研究の取組により、これまで進みにくい状況があった保護者との関係づくりに関する校内研修の機会を学校現場に提供したいと考えた。保護者とのよりよい関係づくりについて、教職員が効果的に学び、力をつけていくことを目的としたOJTプログラムを開発し、研修に必要な資料等を研修パッケージとしてまとめ、発信することを目指したい。

2 研究の目的

保護者と学校とのよりよい関係づくりをテーマとした校内研修プログラムを開発し、研修パッケージとして提供することにより、学校のOJT支援を行う。

3 研究の方法

1年次（昨年度）

- 研究の目的・取組の方向性を確認
- 県内教職員への抽出調査の実施、分析
- 先行研究機関から取組の聞き取り
- 研究者からの聞き取り、意見交換
- 研修プログラム案の内容構成検討

2年次（今年度）

- 研究の目的・取組の方向性の修正
- 研修プログラム案の試作
- 出前講座・要請訪問等での実践及び検証
- 研修プログラム案の修正・改良
- 研修案について、研究者と意見交換

3年次（来年度）

- 研修プログラム案の修正・改良
- 協力校での校内研修の実施及び検証
- 校内研修パッケージの完成
- 学校及び関係機関への提供

4 研究の内容

(1) 校内研修パッケージ作成の経緯

①保護者と学校の現状

1年次は、県内教職員への調査や先行研究機関への聞き取り等からこの課題の現状や、取り組むべき視点について考察した。島根県教育センターの能力開発研修受講者を対象にアンケート調査を行った。その結果、9割以上の受講者が保護者との関係づくりに関する研修の機会が必要だと考えていることがわかった。また、研修として取り組んでみたい内容としてさまざまな視点が挙げられた。

多くの教職員から複数の回答があったものは下記の項目である。

- 信頼関係づくりの基本姿勢
- 具体的な実践場面を想定して
- 事例から学ぶ
- 様々な教育課題（いじめ・不登校等）に関わる保護者対応
- 関係づくりが難しい保護者への対応

これらの視点は、実際に学校現場で保護者とのかかわる中で多くの教職員が重要であると考え、また日頃から課題に感じていることと言ってよいだろう。これらの中で最も回答数が多かった項目は、関係づくりが難しい保護者への対応についてであった。これは多くの教職員が対応に苦慮する事例を過去に経験したことがある、または現在進行形で取組んでいる最中であるということを端的に表していると言えるのではないか。トラブルや困難な事例への対応の仕方を具体的に学びたいという教職員の意識がうかがえた。

また本研究を進めるにあたり、参考となる先行研究を調査し、千葉県子どもと親のサポートセンターが、平成 27・28 年度に取り組んだ指導主事共同研究「カウンセリングの考え方を活かして築く保護者との信頼関係～事例から考える具体的なアプローチ～」に注目した。

千葉県の研究では教職経験 1～8 年目の若手教職員を対象とした意識調査を行っている。この調査によると、若手教職員の 75%が保護者からの要望を受けたことがあると回答している。そして、どの校種においても、自分の「経験・知識不足」「指導力不足」等、自分自身にその要因があると捉えている者が多いということも明らかにされている。これは、保護者対応に対する若手教職員の「自信のなさ」の表れではないかと我々は捉えた。

さらに千葉県の研究では電話相談や来所相談の内容の分析調査が行われ、学校や教職員に対する保護者の要望や不満といった、いわば“保護者の生の声”を反映した貴重な資料が示されていた。

学校に対する保護者の不満や要望につながる要因を、千葉県の研究では以下のように整理している。

- ・保護者の多くは学校や教員に「わかってほしい」という願いをもっている。
- ・「わかってほしい」内容として、保護者の心配や子どもたちの不安、また何があったのか事実や実態をきちんと把握してほしい等の気持ちを訴え、そのうえで困った状況を「何とかしてほしい」と願っている。
- ・話を聞いてもらえない、疑われた、一方的な叱責を受けた、否定された等と感じている保護者がおり、信頼関係を築くことができていない。
- ・保護者は解決だけでなく、一緒に考える

という教員のかかわりを望んでいる。

- ・初期対応に課題あり。保護者や子どもが不安を感じた初期の段階で、教員がそれをきちんと受け止めないことが、不安を増大させたり、事態を悪化させたりしてはいないか。

保護者の「わかってほしい」「かかわってほしい」という気持ちの理解、意識差を生まないような初期対応をはじめその後のかかわりの在り方が重要であると、千葉県の研究は示している。我々が本研究において研修プログラムの内容を検討していく上でこれらの資料は大いに参考となった。

②校内研修パッケージの概要

我々が作成する校内研修パッケージを、多忙な学校現場において活用してもらえるものとしていくために必要な要件について、以下のように整理をした。

- ・研修主催者が研修内容に精通していなくても実施できるものであること
- ・多忙な学校現場でも負担感なく実施可能な分量であること
- ・教職員が日頃課題意識を持っていることとつながる内容であること
- ・関係づくりへの示唆を含むものであり、かつ内容がわかりやすいものであること
- ・初任者研修の校内における一般研修としても活用できるものであることが望ましい

これらの要件を満たすことを念頭に置いた上で、その内容については 1 年次から検討を重ね、2 年次に試作版を作成した。

1 年次に構成を考え作成した研修プログラム（試作版 1）は初期段階では

以下のような構成とした。

(試作版 1 の詳細は、次頁参照)

- ・ 第Ⅰ部
信頼関係づくりの基本姿勢「聴く」
- ・ 第Ⅱ部
信頼関係づくりの基本姿勢「伝える」
- ・ 第Ⅲ部
トラブルが予想されるケースの対応

2年次となる今年度は、島根県教育センターが実施する出前講座や要請訪問として指導主事が学校等に出向き、上記の内容を含む研修プログラムの試作版を実施した。試作版を用いての研修は、実施後その成果と課題を明らかにし、それを元に内容や構成について改良や修正を重ねた。また、第Ⅲ部の研修内容については、法令等に関する専門的な知見を得るため、プログラムの原案や基本的な考え方について、研究者の助言を得る機会を設けた。

**第 I 部 信頼関係づくりの基本姿勢・「聴く」…(60分)****1 ノンバーバルコミュニケーションの重要性**

- 〈1〉 動画1「来校した保護者への対応」を視聴し、対応の課題を考える。
- 〈2〉 動画をもとに「ノンバーバルコミュニケーションの重要性」を確認する。
- 〈3〉 非言語コミュニケーションを意識した対応の一例として、動画2を視聴する。

2 「聴く」姿勢

- 〈1〉 「人とかかわるときの心構え」について確認する。
 - 相手を人として大切に作る姿勢
 - 相手の身になった話の聴き方

3 「聴く」ポイント

- 〈1〉 動画3「母親と担任の面談」を視聴し、担任の対応についてペアで話し合う。
- 〈2〉 動画をもとに、「聴く」ポイントを確認する。
 - ノンバーバルコミュニケーション
 - 事柄ではなく思いや感情への反応
 - 目の前の人の『今』の思いへの反応
- 〈3〉 「聴く」ポイントを意識した対応の一例として、動画4を視聴する。

4 ワークシート演習「聴く～相手の思いを感じ取ろう」

ワーク1 「学校図書の貸し出しについての相談」

ワーク2 「宿題についての相談」

ワーク3 「SNS についての相談」

- 〈1〉 保護者の思いを受けとめ、どのようなコメントを返すか個々で考える。
- 〈2〉 どんな対応が「分かってもらえた」と感じるかグループで協議する。
- 〈3〉 各ワークにおける、ポイントの解説と対応の一例を紹介する。
 - 「事柄」ではなく「思い」への反応
 - 「昨日」ではなく「今」の思いへの反応
 - 「子ども」ではなく目の前の「保護者」の思いへの反応

第Ⅱ部 信頼関係づくりの基本姿勢・「伝える」…(60分)

1 I (アイ) メッセージ

〈1〉「私=I」を主語にした、相手の心にひびく伝え方を紹介する。

2 「伝える」姿勢

〈1〉「人とかかわる心構え」について確認する。

○相手を人として大切に作る姿勢

○相手の身になった話の聴き方

○相手の主体性を信頼したかわり方 一指図ではなくお願いする形で—

3 演習「伝え方」のポイント

〈1〉動画5「学校の口座引き落としに不服がある父親への対応」を視聴し、父親にどのように対応をするか、個々で考える。

〈2〉「伝え方」で配慮すべきことをグループで協議する。

〈3〉「伝え方」のポイントを確認する。

○目の前の人の中の気持ちを受けとめる

○I (アイ) メッセージで伝える

○伝えるべきことは伝える

〈4〉「伝え方」のポイントを意識した対応の一例として動画6を視聴する。

4 「伝え方」の方法や事例の紹介

5 結果と考察

(1) 試作版1の結果

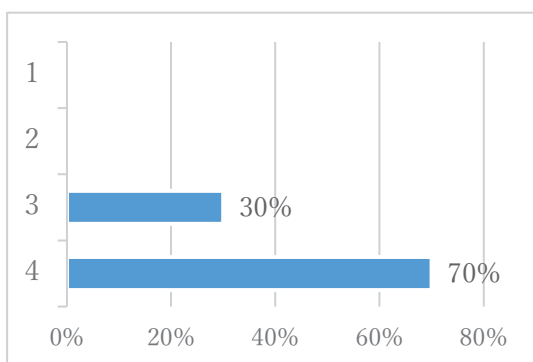
【事後のアンケート結果】

A 演習を取り入れたプログラムの内容は、わかりやすかったか？

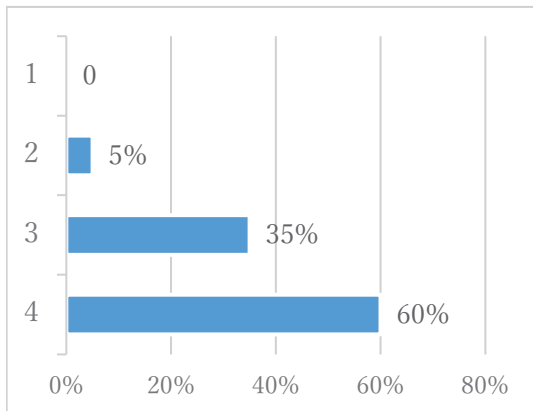
1:わかりにくい 2:すこしわかりにくい
3:わかりやすい 4:とてもわかりやすい

第I部

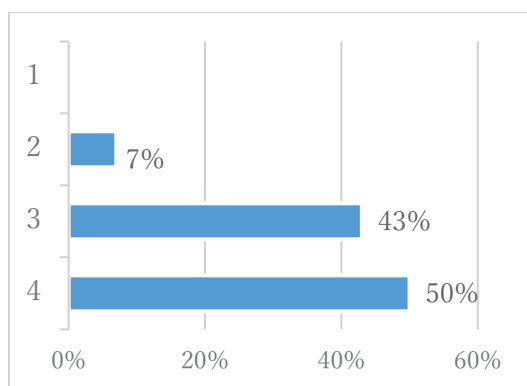
1 ノンバーバルコミュニケーション



3 「聴く」ポイント

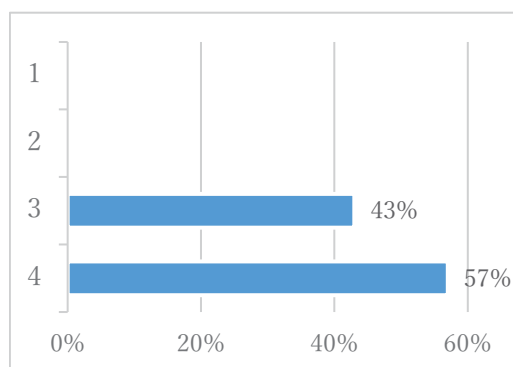


4 ワークシート演習「聴く」



第II部

3 伝え方のポイント



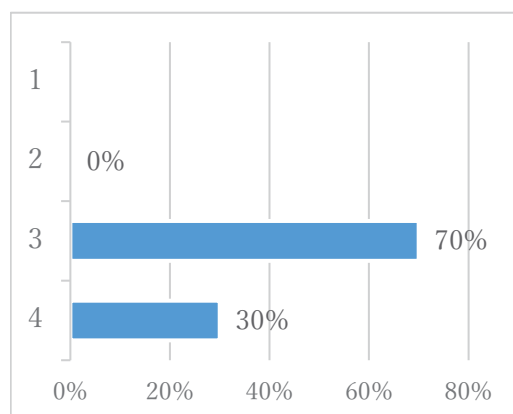
B もっと学んでみたいと感じた内容
(上位3つ)

- ・I (アイ) メッセージで「伝える」
- ・「今」の思いを受けとめる
- ・関わるときの心構え

C 研修プログラムの活用について

(a) 研修プログラムを在籍学校の職員研修で活用したいか。

1:活用したくない 2:あまり活用したくない
3:活用したい 4:とても活用したい



(b) 「4:とても活用したい」「3:活用したい」と答えた理由

- ・対応の基本がおさえてあり、分かりやすい。
- ・進行の台詞もあり、いつでもどこでも取り組める。

- ・保護者対応は組織で共通理解を図りスキルアップを図る必要がある。
- ・保護者対応で失敗や苦慮している教員が多い。
- ・若い教員の増加のため。基本的な保護者対応の研修が必要。
- ・自分の対応をふりかえるのに役立つ。 等

D 研修パッケージの3部構成について

○よい

- ・テーマ別で分かりやすく学べる。
- ・内容がコンパクトで情報が入りやすい。 等

E 「聴く」「伝える」というプログラムの視点について

○よい

- ・身近で、基本的な視点でよい。
- ・実践につなげやすい視点でよい。
- ・どちらも大切で関連がある。 等

F プログラムの分量について
(60分程度で実施できる量)

○よい

- ・短時間で出来ることは魅力的。

△長い

- ・全て実施した場合、半日の校内研修で受けられる分量だと良い。 等

G 研修プログラムの教材に「動画」を取り入れていることについて

○よい

- ・研修に対する意欲が持続できる。
- ・ノンバーバルコミュニケーションの重要性に気づかされる。
- ・表情や口調で、思いや対応がより伝わる。 等

- ・実際の場面をイメージしやすく、演習や協議に取り組みやすい。
- ・実践化しやすい。
- ・場面や、対応のポイントが理解しやすい。
- ・学校全体で共通理解がしやすい。

△要望や改善案

- ・ノイズが大きいと言葉が聞き取りづらい。 等

H 研修プログラムに「グループ協議」を取り入れていることについて

○よい

- ・意見交流から多くの気づきや多様な対応を見いだせる。
- ・思いや悩みを共有でき、不安が和らいだり勇気づけられたりする。
- ・ベテランと若手教員がグループ協議をすることでOJTの活性につながる。 等

△要望や改善案

- ・他のグループの意見を聞く時間があるとさらに視野が広がる。

I プログラムを体験して感じたこと

- ・自分自身の保護者対応について、ふりかえることができる。
- ・保護者とのかかわりの中で大切にすることを見つけられる。
- ・明日からの実践に生かせる。 等

J 盛りこんでほしい内容や要望

- ・保護者の立場を体験する演習
- ・第Ⅲ部「課題が生じたときの対応」のプログラムをぜひ体験したい。
- ・クレーム対応やトラブルになりそうな対応について。 等

(2) 試作版1の考察

〔A〕の「演習を取り入れたプログラムの内容は、わかりやすかったか？」というアンケートについては、試作版1の中でも第Ⅱ部〔3〕〈1〉のプログラムが肯定的評価の割合から見ても自由記述から見ても評価が高かった。内容は「学校集金の口座引き落としについて不服のある保護者の方の主張」に対し、どう対応するかを考える演習である。これは、このような設定の状況が学校ではよく見られる光景であり、困った経験のある教職員も多い内容であったためだと思われる。つまり、教職員にとって課題意識の高い内容であったことに起因すると考えられる。おのずと受講者の当事者意識が高まり、研修意欲の向上につながったと思われる。同様のことは、〔I〕や〔J〕の記述式の評価の中にも多数見られた。このことは逆に捉えれば、保護者との関わりにおいて日頃から課題意識を持っている状況について取り上げることで、受講者の当事者意識が高まり、深い研修につながると考えられる。これは、校内研修パッケージに求められる要件の1つである「教職員が日頃課題意識を持っていることとつながる内容であること」とも合致することである。すなわち、関係づくりの基本的な姿勢を大切にしつつも、教職員なら誰しも対応に困った経験があるような課題意識も持ちやすい場面を取り入れることで研修効果が高まるものと考えられる。

職員研修での活用については、〔C〕よりすべての受講者が活用したいと回答していた。その理由からも、本プログラムは、学校現場のニーズに応えるものであり、研修内容も概ね期待に応えるものになっていると考えられる。また、その構

成が3部構成になっている点も、〔D〕に見られるように、テーマ別で1回の分量が多過ぎず活用しやすいとの回答が得られた。

また、出前講座当日の受講者の発言や事後アンケート〔G〕や〔H〕からも、演習課題がやや難しいものであっても、動画で視覚的に捉え、グループで協議する場面を設定することで、各演習のねらいを達成した姿が見られた。このことから、視覚教材の導入等の教材提示の工夫や研修方法の工夫により研修内容への理解が深まるものと考えられる。

〔I〕からは研修プログラム全体を通して、「保護者とのかかわりにおいて自分自身が大切にしたいことを見つけることができた」という趣旨の感想が複数見られた。同様に〔B〕の記述からも、特に関心を持ったプログラムの内容について、研修意欲の向上が見られた。また、〔E〕や〔F〕からプログラムの構成や分量についても適切であったことが窺えた。このことから、本プログラムは内容、構成、分量について、OJTプログラムとして概ね適切であり、教職員の保護者との関わりにおける実践意欲の向上につながるものであったと考える。

以上により、プログラムの大筋は、ねらいを達成するために適切であったと考える。

一方で、出前講座では、第Ⅰ部、第Ⅱ部の「聴くこと」、「伝えること」の基本的な姿勢について取り扱ったが、〔J〕に見られるように受講者からは、クレームへの対応やトラブルになりそうな場面の対応についての研修を求める声も多く寄せられた。これらは、第Ⅰ部、第Ⅱ部で押さえた人間関係づくりの基本姿勢を応用したものではあるが、受講者にと

っては、その点がつながりにくいようであった。第Ⅲ部を求める声は、困り感の強いこうした応用場面での具体的対応を学びたいという気持ちから発せられたものと推測できる。しかし、本研究で想定している第Ⅲ部で扱う「トラブルが予想されるケース」とは、教職員の関わり方とはまた別の要素も必要になる特別な場合である。すなわち受講者の求める内容を取り入れるには、第Ⅰ部、第Ⅱ部の内容を実践的に応用したプログラムの作成が必要である。

また、一方第Ⅱ部で取り扱ってきた「伝えること」については、第Ⅰ部の「聴くこと」が出来て初めて何を伝えるのが決まる言わば表裏一体の対応である。

「聴く」ことが十分に出来ていない状態で伝えるものは、相手の思いに添ったものではなく、よりよい関係づくりには結びつかない。そこで、第Ⅰ部、第Ⅱ部の構成をつくり直し、「聴く」、「伝える」を合わせて、第Ⅰ部「信頼関係づくりの基本姿勢」とし、それらを実践的に応用した第Ⅱ部「課題が生じたときの対応」とした。第Ⅲ部については、予定通り「トラブルが予想されるケースの対応」とした。このようにプログラムを組み直し、それに合わせた動画や演習課題をつくり直し、試作版2とした。そして、これを要請訪問等で実施検証する運びとなった。

(試作版1の詳細は、次頁参照)

**第 I 部 信頼関係づくりの基本姿勢 …(60分)****1 人とかかわるときの心構え**

- 〈1〉「保護者との関係づくり」で、自分が大切にしてきたことをペアで話す。
- 〈2〉「人とかかわるときの心構え」について確認する。
 - 相手を人として大切にする姿勢
 - 相手の身になった話の聴き方

2 ノンバーバルコミュニケーションの重要性  

- 〈1〉動画1「来校した保護者への対応」を視聴し、対応の課題を考える。
- 〈2〉動画をもとに「ノンバーバルコミュニケーションの重要性」を確認する。
- 〈3〉非言語コミュニケーションを意識した対応の一例として、動画2を視聴する。

3 思いを受けとめることの重要性  

- 〈1〉保護者への対応が違う動画3、4「話を聞いて欲しい保護者への対応」を視聴し、担任の対応の違いをペアで話し合う。
- 〈2〉動画をもとに、「思いを受けとめること」について確認する。
 - 事柄よりも思いを受けとめることの大切さ

4 ワークシート演習「相手の思いを感じ取ろう」  

ワーク1 「学校図書の貸し出しについての相談」

ワーク2 「宿題についての相談」

ワーク3 「SNS についての相談」

- 〈1〉保護者の思いを受けとめ、どのようなコメントを返すか個々で考える。
- 〈2〉どんな対応が「分かってもらえた」と感じるかグループで協議する。
- 〈3〉各ワークにおける、ポイントの解説と対応の一例を紹介する。
 - 「事柄」ではなく「思い」への反応
 - 「昨日」ではなく「今」の思いへの反応
 - 「子ども」ではなく目の前の「保護者」の思いへの反応

5 I (アイ) メッセージについて考える。

- 〈1〉「私=I (アイ)」を主語にした、相手の心にひびく伝え方を紹介する。

第Ⅱ部 課題が生じたときの対応…(60分)

1 初期対応の重要性

- 〈1〉人は本来主体的な生き物
- 〈2〉マズローの欲求5段階説
- 〈3〉人の特性を理解した上での対応

2 保護者から相談を受けたときの対応

- 〈1〉対応の基本姿勢「聴く」「伝える」を確認する。
- 〈2〉動画5「母親と担任の面談」を視聴し、担任の対応についてペアで話し合う。
- 〈3〉動画をもとに、「聴く」ポイントを確認する。
 - 相手の思いや感情の受けとめ
 - これまでのご苦労へのねぎらい
- 〈4〉「聴く」ポイントを意識した対応の一例として、動画6を視聴する。

3 演習「言いにくいことを伝えるときの対応」

—いじめに関する保護者面談—

- 〈1〉事例「友人関係のトラブル」を読み、いじめの加害児童の父親に対して、担任として「何を」「どのように」伝えるか、個々で考える。
- 〈2〉グループで、担任の対応について協議する。
- 〈3〉父親に対する2通りの担任の対応の動画7、8を視聴し、「言いにくいことを伝えるとき」のポイントを確認する。
 - 保護者の刻々と変わる今の気持ちの受けとめ

(3) 試作版2の結果

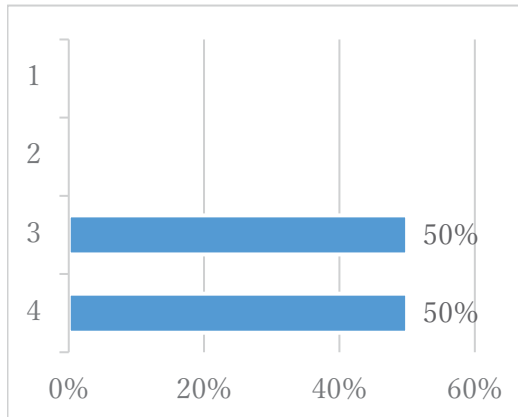
【事後のアンケート結果】

A 演習を取り入れたプログラムの内容はわかりやすかったか？

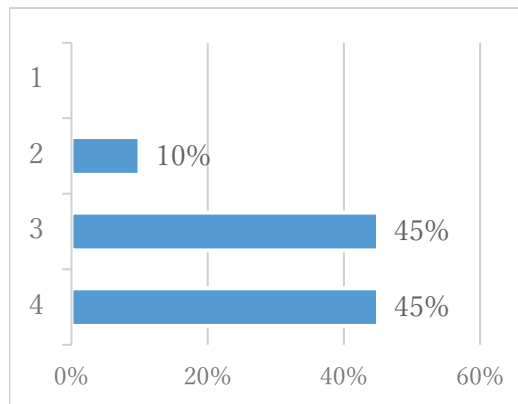
1:わかりにくい 2:すこしわかりにくい
3:わかりやすい 4:とてもわかりやすい

第Ⅰ部 信頼関係づくりの基本姿勢

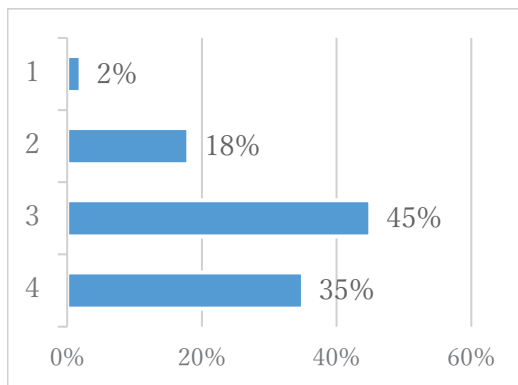
① 人とかかかわるときの心構え



② ノンバーバルコミュニケーション



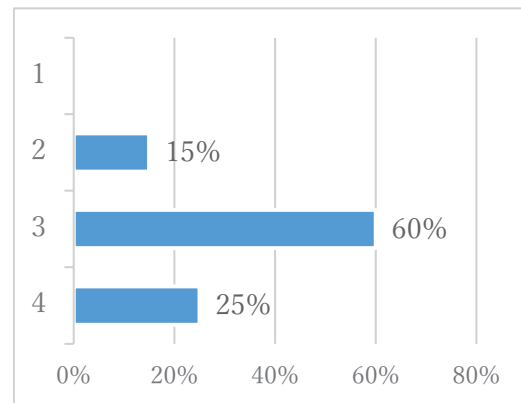
③ 思いを受けとめる



④ 演習「思いを感じ取ろう」

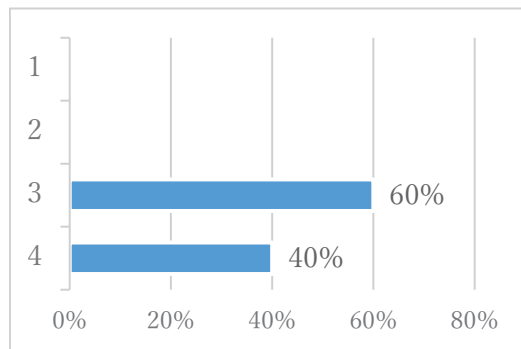


⑤ Iメッセージで伝えよう

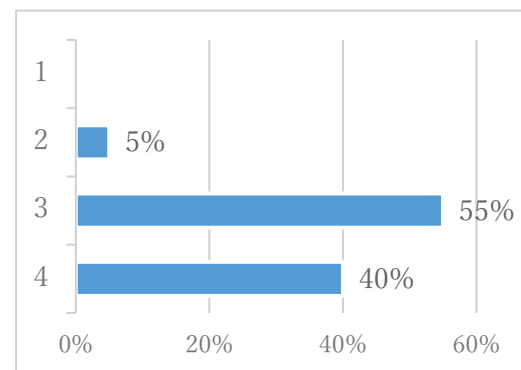


第Ⅱ部 課題が生じた時の対応

① 初期対応の重要性



② 保護者から相談があった時の対応



3 保護者へ伝える時の対応

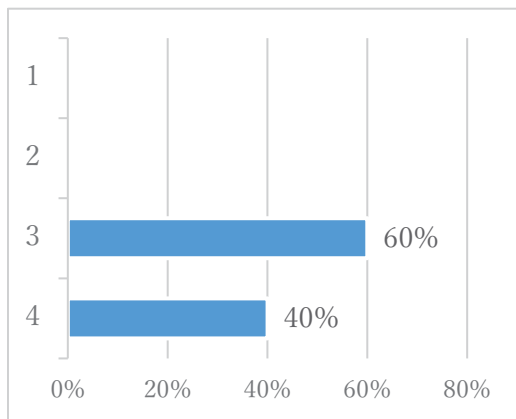
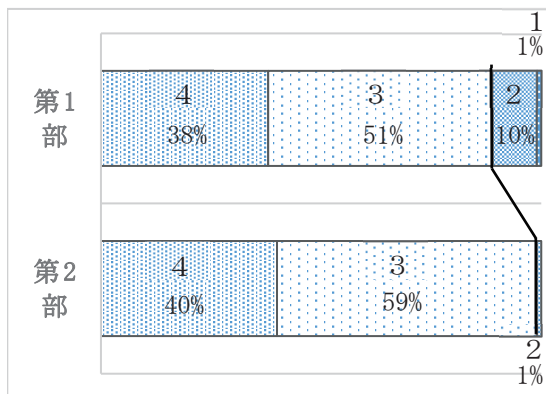


図1 第1部と第2部の数値結果の比較



4:とてもわかりやすい 3:わかりやすい
2:すこしわかりにくい 1:わかりにくい

- ・第2部の内容の方が勉強になった。
 - ・第2部の内容はわかりやすかった。
- 等

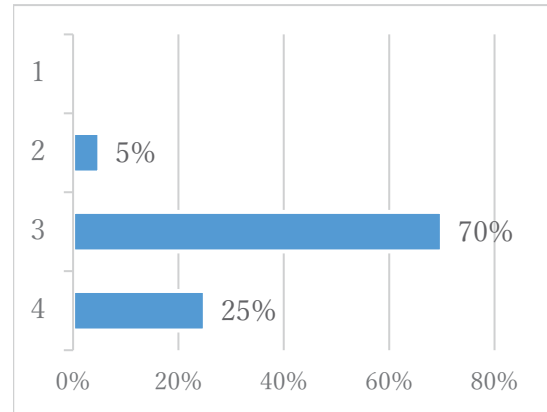
B もっと学んでみたいと感じた内容 (上位3つ)

- ・言いにくい事を保護者へ伝える時の対応
- ・保護者から相談を受けた時の対応
- ・I (アイ) メッセージで「伝える」

C 研修プログラムの活用について

(a) 研修プログラムを在籍学校の職員
研修で活用したいか

- 4 ぜひ活用したい 3 活用したい
2 あまり活用したくない 1 活用したくない



(b) 「4:とても活用したい」「3:活用したい」と答えた理由

- ・本研修は、分かりやすい、考えやすい、気づくことが多い。
 - ・組織での対応に役立つ。
 - ・保護者対応に困り感、不安感、多忙感をもつ教員が多い。
 - ・間違った保護者対応をしている教員がいる。
 - ・若手教員や経験の浅い教員の増加から基本的な対応の研修が必要。
 - ・今後様々な難しいケースが予想され、事例を通した研修が必要である。
- 等

(c) 「2:あまり活用したくない」と答えた理由

- ・研修内容に精通していないと、研修の進行に不安や負担感がある。
 - ・学校の現状のニーズと一致する点が、少ないため。
- 等

D 研修パッケージの3部構成について

○よい

- ・順序立てられていてよい。
- ・それぞれのねらいが明確で分かりやすい。
- ・スモールステップで、2回に分けて研修できるので活用しやすい。等

△要望・改善案

- ・学校の研修だと長すぎる。
- ・内容が濃くなりすぎる。

E 「基本姿勢」「課題が生じたときの対応」というプログラムの視点について

○よい

- ・構成が段階的でよい。
- ・それぞれが、より具体的でよい。等

F プログラムの分量について
(60分程度で実施できる量)

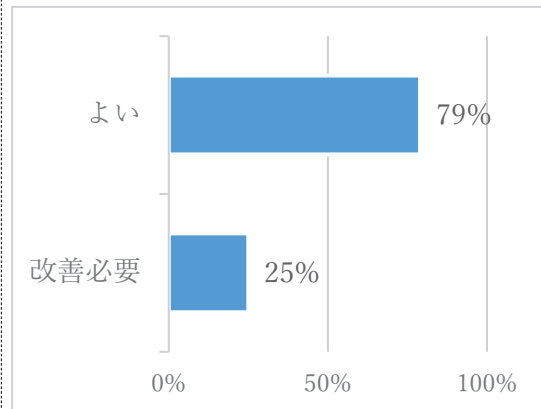
○よい

- ・長期休業中の午前・午後の枠で研修できる分量でよい。
- ・年に1部、2年間で研修できる。
- ・45分ぐらいがいい。等

△要望・改善案

- ・45～60分は確保が難しい。15～30分がよい。
- ・2部合わせた60～90分の短縮版もあると使いやすい。
- ・職員会での利用を考えると20分ぐらいのミニ研修が活用しやすい。

G 研修プログラムの教材に「動画」を取り入れていることについて



○よい

- ・文字や言葉だけより、研修内容がより伝わる。
- ・言葉の強弱、スピード、表情等が、読み取れるよさがある。
- ・対応の比較ができ、対応のポイントが分かりやすい。
- ・場面や演習内容が把握しやすく、ワークや協議が容易にできる。
- ・全教職員で共通理解を図る上で有効である。等

△要望・改善案

- ・動画と現場の対応が、かけ離れていると場面設定が理解できない。
- ・動画の台詞は具体的で参考になるが、言い方のマニュアルと捉えられる可能性がある。
- ・音声や会話の内容が明確でないと伝わらない。
- ・動画が長いと伝わりにくい。等

H 研修プログラムに「グループ協議」を取り入れていることについて

- ・ベテランと若手でグループ協議をすることで、OJTの活性につながる。
- ・グループ協議を取り入れることで、自身の取組を振り返り対応を見つめ直すことや、新たな対応を知ることができる。 等

I プログラムを体験して感じたこと

- ・演習、ペア・グループ協議、動画など様々な視点で考えることで、考えを広げたり深めたりできる。
- ・保護者と円滑な人間関係を築き、子どもの成長を支えるために活用できる。
- ・プログラムを異校種間で活用することで、校種による対応の違いが表れ視野がより広がる。
- ・初任研で活用できる。 等

J 盛り込んで欲しい内容や要望

- ・動画通りの対応でも上手くいかないケースを体験したい。
- ・困難な事例を取り扱うプログラムを体験してみたい。

(4) 試作版2の考察

第Ⅰ部、第Ⅱ部の構成を「信頼関係づくりの基本姿勢」と「課題が生じたときの対応」につくり直したことについては、**E**の結果に見られるような記述が大半で好評であった。特に基本と応用というような段階的な構成になっている点が評価された。また、**H**と**I**の結果より、グループ協議を取り入れていることもその効果を期待される意見が多かった。さらに、プログラムで扱った研修内容そのものも、教職員の資質向上の効果を期待してもらえるものであった。

Aの「演習を取り入れたプログラムの内容は、わかりやすかったか？」というアンケートについては、試作版1と試作版2を比べると、一見すると、試作版1よりも試作版2の方が否定的評価の割合が増えたように見える。しかし、試作版2は各プログラムの内容も第Ⅰ部、第Ⅱ部の構成も大きく異なっているため、単純に数値の比較はできない。ただ、その上で、試作版2の「**3**思いを受けとめる」で20%、「**5**Iメッセージ」で15%の人が否定的評価をしている。このうち、「**5**Iメッセージ」については、プログラムの時間を圧縮するため内容を大きく割愛している。このため、十分な説明も演習も入れていないため、わかりにくいと思われる方が多いのは当然の結果と考える。「Iメッセージ」の取扱いについては、プログラムの構成上必要最小限の内容をわかりやすい言葉で伝える工夫が必要である。しかし、「**3**思いを受けとめる」については、次の2点にわかりにくさの要因があるのではないかと考えた。

まず、1点目にプログラムの難易度よりも、動画の設定の不自然さが理解度の

低さにつながったのではないかということである。このことは、**G**の要望・改善案にあげられるような意見が、要請訪問の研修中に受講者から多数寄せられた発言からも推測できる。第Ⅰ部の「**3** 思いをうけとめる」の動画に関する**G**の記述からも、試作版2の作成時に新たに作成した動画の場面設定の不自然さを指摘する声が多く見られた。このことから伝えたいプログラムのエッセンスよりも冒頭で活用した動画の設定に対する不自然さが否定的評価の割合を高めていることは明らかだと考えられる。

プログラムの理解につながる自然な場面設定とはどのようなものであるかを考察するにあたり、**図1**のグラフより、「課題が生じたときの対応」を扱った第Ⅱ部より「人間関係づくりの基本姿勢」を扱った第Ⅰ部の方がわかりにくいと回答した割合が高くなっていることに注目した。

第Ⅰ部の評価の低さの一部には、分量の課題もある。第Ⅰ部は再編成した際に「聴く」、「伝える」の両方の基本的内容を丁寧に豊富に盛り込んだ。このことから1つ1つのプログラムにかかる時間は短縮され、印象に残りにくくなったことも考えられる。しかし、それ以上に第Ⅱ部の方が分かりやすいという評価につながったのは、第Ⅱ部の難易度は第Ⅰ部よりも高いものの、受講者が現場で課題意識を持っている場面と直結する内容であり、当事者意識が高まったと考えられる。つまり、プログラムの難易度よりも動画の完成度や取扱い時間の長短、そして日頃課題意識を持っている内容と直結しているかということが、理解度の評価につながっていると考えられる。このことは、他のプログラム項目につい

での自由記述からも窺える。また、**B**や**J**にあげられたもっと学びたいこと等の要望にあげられていることとも合致する。こうした点は、校内研修パッケージに求められる要件であげていることであり、動画の設定を課題意識の高い場面にしていくことが重要であると考えられる。また、動画の完成度については、撮影方法、機材の準備、台本の工夫等をしていく必要がある。

2点目の理由として、研修参加者の校内研修主催者としての自覚の高さが否定的評価の増加につながっていることも推測される。

試作版2の実施前には、完成時を見据え、受講者に自らがプログラムを活用して校内研修を行うつもりで見ていただくようお願いしている。また、受講者層も校内研修の主催者として実施する立場の人が多かった。このため、プログラムの実施者としての当事者意識が高く、質問に答えられる程度まで理解を深めようとする姿勢が感じられた。このことは、逆に研修の主催者となったときに十分に人に伝えられないと感じる内容については、否定的評価となることが考えられる。このことは、**C** (c) の記述や**D**、**F**の要望・改善案の記述に如実に表れている。こうした視点は、今後プログラム開発にあたって、校内研修パッケージに求められる要件の1つである「研修の主催者が研修内容に精通していなくても実施できるものであること」ということを満たすものにしていく上でも重要なことである。受講者のみならず、主催者の立場での改善も求められていると考える。

研修プログラムに保護者と関わる具体的な場面の動画を導入したことは、言

業では伝わりにくい雰囲気や対応の実際をイメージしてもらうには大いに成果があった。また、研修のプログラムに動画を取り入れることにより、受講者の注意力を喚起し、研修意欲を高めるのに役立った。一方で、動画そのもののつくりに関心が奪われ、場面設定や出演者の演技、台詞といった表面的な課題に注目させてしまうという負の効果もあった。このため、受講者には、動画に込めた関係づくりの基本姿勢が十分に伝わらなかった面がある。そこで、受講者の動画視聴の視点が、信頼関係づくりの基本姿勢や話し手の心に変容が起こる関わり方に向けられるよう、動画制作時に何らかの工夫をする必要がある。今回検証から考えられる工夫すべき点には次のようなものがある。

- ・場面設定が、多くの受講者にとって自然に起こりうる状況と感じてもらえるものであること。
- ・場面設定が、多くの受講者にとって対応に課題意識を持っているものであること。
- ・動画で表現されている具体の対応や台詞ではなく、そこに込めた関係づくりにおいて汎用性のある姿勢や感性が伝わるように工夫されていること。
- ・動画の台本や演出を工夫し、ねらいとは異なる点に受講者が注目しないようにすること。

6 今後の課題

今年度、研修パッケージ第Ⅰ部、第Ⅱ部の試作版を作成し、学校及び各種研究部会において実施することができた。そこで成果と課題をもとにプログラムの有効性を検証し、改善を重ねることができた。また、第Ⅲ部につ

いては、プログラムの原案について、専門家から法令等の助言を得ることができた。しかし、その機会が2月に得られたこともあり、年度内に助言を踏まえて修正し、試作版を作成するには至らなかった。そこで、当初2年間の調査研究期間であったものを3年間に延長し、より質の高い成果物ができるように計画の見直しを図ることにした。今後取り組む課題としては次のようなことがあげられる。

(1) 第Ⅲ部「トラブルが予想されるケースの対応」で扱う予定の内容の提示の仕方の検討

学校現場では、教職員が第Ⅰ部、第Ⅱ部で扱った関係づくりの基本姿勢を踏まえて丁寧に関わったとしても保護者との関係が崩れているケースがある。そこには、保護者自身の課題が大きい場合や金銭トラブル等法的対応が必要な場合、子どもの事故等の責任問題に発展する場合等、専門的な知見が必要なものもある。これらの問題に対して、専門機関との連携を含めた第Ⅰ部、第Ⅱ部で取り上げた内容とは異なる視点からの対応が求められる。それが第Ⅲ部である。しかし、専門家の助言を通して、これを第Ⅰ部、第Ⅱ部と同様な形式で作成することにはいくつかの課題があることもわかった。そこで、それらの専門的知見が必要な題材をどのように提示していくか再検討することから始める必要がある。

(2) 試作版3の作成とその有効性の再検証

第Ⅰ部、第Ⅱ部は、今年度十数回に及ぶ小プログラムの改良と2回の試作版全体の作り直しを行った。そして、現在試作版2の振り返りをもとに、小プログラムの改良を行っている最中である。今

後、第Ⅲ部の内容を加味し、試作版3を作成する。作成したプログラムは、その有効性を検証する必要がある。次年度も出前講座、要請訪問等でプログラムを指導主事が実施し、受講者から事後アンケートを取っていく。指導主事自身が実施しながら把握した課題やアンケート結果から得られた情報をもとにプログラムの有効性の再度の検証を行っていく。これらをもとにプログラムに改良を加えていく。

(3) 協力校における研修担当者によるプログラムの試行を兼ねた研修の実施と有効性の検証

(2)の改善が終了後に協力校を募り、指導主事ではなく学校の研修担当者に校内研修を兼ねたプログラムの試行を依頼する。その際、指導主事は研修の運営には関わらず、参観に徹し、研修パッケージがOJTプログラムとして機能するものであるか検証をする。パッケージには、取扱説明書となる資料をつけておき、研修担当者が自力で校内研修を展開できるようにしておく。実施後には、研修担当者と受講職員の両方からアンケートを取り、プログラムの有効性を検証する。ここで、課題が見つければプログラムにさらなる改良を加える。

(4) 完成版の作成と提供

(3)を経て、完成されたプログラムを研修パッケージの完成版とする。提供方法については、学校現場での活用しやすさを踏まえて、今後検討することとする。また、令和3年度島根県教育センター教育研究発表会において、研究の概要について説明し、プログラムの周知を図る。また、研究紀要において3年間の調査研

究の全体像を掲載する。

【引用文献・参考文献・参考DVD】

- 文部科学省 (2017)
「小学校及び中学校学習指導要領」
- 文部科学省 (2017)
「小学校及び中学校学習指導要領(平成29年告示)総則編」
- 文部科学省 (2010)
「生徒指導提要」
- 千葉県子どもと親のサポートセンター (2017)
「研究報告第15号 カウンセリングの考え方を活かして築く保護者との信頼関係 ～事例から考える具体的なアプローチ～」
- 千葉県子どもと親のサポートセンター (2017)
「若い先生のための保護者との信頼関係ハンドブック ～カウンセリングの考え方を活かして築く保護者との信頼関係～」
- 嶋崎政男監修 (2013)
「映像で見る校内研修教材 Vol.1 保護者トラブル」 学事出版
- 小野田正利 (2008～)
「学校讃歌ブックレット号外」大阪大学大学院・人間科学研究科・教育制度研究室
- 小野田正利監修 (2012)
「教員のための保護者対応力向上シリーズ 第1巻：保護者対応の基本」日本経済新聞出版社
- 島根県立松江教育センター第3研修課 (1997)
「シリーズ学校教育相談 こどもの成長を援助する教師のかかわり」
「シリーズ学校教育相談 こどもの成長を援助する教師のかかわり～授業場面編～」
「シリーズ学校教育相談 内面の理解」
「シリーズ学校教育相談 面接」
「シリーズ学校教育相談 心の居場所となる学級」
- 島根県立松江教育センター (1999)
「カウンセリングマインドを生かした生徒指導～子どもの自己変容を導く教師のかかわり」